

## ソクラテス「学問とはなにか」を語る

担当：石田 2015/2/19

- 1 「学問ってというのは、もともと、神様が創られた世界の真理をあきらかにすることだ」
- 2 人間界だけではなく、この地球上あるいは地球の外側も含めて探求可能な対象は、全部学問の対象になる。地震の真相、神がなぜ地震現象を存在させたのか・・・地球意識との関係を解明することも立派な学問である。地球意識の自己調整システムの研究。
- 3 「真理」には「分る者には分り、分からない者には分からない」というところがある。最後は「信仰」によって受け入れるしかない。ガチガチの唯物論者には次回の人生で
- 4 なぜ、死を賭けたのか？「真理への確信」があったから。ほかの人たちは、それを理解できないし、学ぼうとしないし、聞こうとしない。それは向こうの自由だから。東大の地震学者も地震爆発論を知ろうとしないし、学ぼうとしない。でも、国を誤らせている。石田もアブ？
- 5 当時も言論人がたくさんいた。内容レベルの上下はあったんだけど、同時代人に、なかなかそれが分からない。現代も同じである。歴史の検証を待つしかない。
- 6 今で言う「ポピュリスト」(大衆迎合主義者)に当たる人は、当時もいた。人気取りの意見を言う人によって民衆は馴される。現代の反原発左翼もポピュリスト。
- 7 なぜ「死」を恐れなかったのか？この地上的な生命の維持、「単純な生命の存続が最高の善である」みたいな考え方に対しては、抵抗する気持ちがあった。
- 8 今の日本人は、「地上の生命を生き長らえることが最高善だ」と思っている人が、多数。小室直樹「大予言」:「神も仏もなく、善悪も正義も無い。ただひたすら、この世の命を生き長らえさせ、できるだけ快適に、快樂に生きることが「最高の価値」である。」これが現代の左翼。だから、本当の左翼ではない。この世的な“快適論者”が左翼に見えているだけ。右翼でも唯物論者がいる。
- 9 「この地上を超えた真理こそが最高善」。その意味で、「死を恐れていなかった」、「真理を曲げるぐらいなら、どうぞ死刑に」。イエスだって、基本的には同じ。
- 10 そういう少数の真理を曲げないで貫き通した人が、やはり、人類の歴史をつくってきたんだと思う。固体地球物理学を脱して、学問を前に押し進める使命？
- 11 今の「学問」には、信用できないものがある。数多くの“ガラクタ”が生み出されている。「単なる思想の自由市場で淘汰を待つのみ」という状況。「何が正しいか」ということが分からないし、「ブームに則って広がる」ということもあるので、真実は、そう簡単に分かるものではないと思います。プレート論も活断層理論も時代のブームであり、東大教授とその教え子の高級官僚がポピュリストとなって広めている。
- 12 間違いの始まりは“うぬぼれ”から来る。うぬぼれを防ぐには慎んで謙虚であること。「正思」の判定基準が「謙虚さ」。欠ける原因は自己顕示欲。不動心を心がけること。「素直さ」「自助努力」欠ける原因を知って自己点検することが大切。
- 13 「民意」も尊いが、間違っていたら「間違っている」とアジ演説することも必要。「哲学」は知識人用の「宗教」「リーダーを育てる宗教」だった。自分はその教祖だった。
- 14 「無知の知」は現代も大切である。「アイデア」の世界は説明不可能の素晴らしい世界。
- 15 HSUで「人間の値打ちは魂の輝き」だと教えよ。「この世的な価値観を一旦捨ててでも、その道を歩む」という求道者の精神を育てよ。主からの「光の証書」が最高である。
- 16 (あとがき) 守護霊は正直である。そしてその言葉は、数ヶ月後に実現していく。謙虚に仏法真理を学べば、その事実が分ってくるはずだ。何が実現するのか、楽しみ。